

児童の休み時間の利用・過ごし方と行動様式の関連

山下 玲香 (中部大生命健康科学部)
都築 繁幸 (愛知教育大学教育学部)

要約 本研究は、小学校4年生から6年生の児童を対象に休み時間の利用・過ごし方が行動様式にどのように影響しているかを明らかにするために男女差や学年差の観点から検討した。A県内B市の小学校3校の4年生から6年生の児童、471名を分析した。その結果、行動様式尺度として「学級協力」、「友人関係の維持」、「遊びの創造」、「遊びの探究」の4因子が抽出された。そして屋外でのボール遊びや遊具、休み時間の関わりの対象、男女の混合、学年、遊び仲間の勧誘の要因が行動様式に何らかの影響を与えていることが示唆された。これらの要因に加え、男女差の要因が「友人関係の維持」において、学年差の要因が「学級協力」と「遊びの探究」において影響していることが示唆された。休み時間にこれらの要因が含まれる活動を取り入れて児童の運動意識が変容していくかどうかを検討することが今後の課題とされた。

キーワード：休み時間、行動様式、男女差、学年差

I. はじめに

学校において体育の授業以外に児童が自由に集団で遊べ、運動できる時間は、中休みや昼休みなどの休み時間である(以下、「休み時間」)。大半の児童が習い事や塾などに行き、遊ぶ時間が減っている生活をしており(鶴山ら, 2008)、休み時間は、15分~30分程度の短時間でありながらも身体活動が確保できる貴重な時間となっている。

就学前段階において男児では相手の性に関わらず社会的スキルに優れているかどうかを基準として遊び仲間を選んでいるが、女子はそれとは異なり、男児よりも仲間を好む理由が多様化している(中台, 2003)。児童の多くが屋内・孤立型の遊びを行い、自ら体を動かすことに必ずしも積極的ではない(重吉ら, 2009)、友だちとトラブルを起こす、新たな遊びを見つけだせない、遊びのおもしろさを自分で創造できない等、遊びにおける対人関係力、コミュニケーション力、想像力が低下していることが指摘されている(小倉, 2014)。

これらの傾向は、小学校段階になってもみられる。休み時間の遊び場所は、男子では屋外、女子は屋内活動を楽しみ(藤原ら, 2014)、運動場での遊びは女子より男子が高く(渡辺ら, 2000; 渡辺, 2001)、中・高学年の女子は外遊びよりも室内での談笑や読書などを好む(高橋ら, 2012)等が示され、運動時間が十分ではないことが体力・運動能力の低下の一因となっていることが指摘されている(文部科学省, 2002)。

この実態を改善していくために学校が計画的に取り組んだ実践例を報告し、児童の運動習慣を促進している(文科省, 2016)。しかしながら、休み時間に集団遊びや外遊びをしない児童がいる状況が依然、みられる(奥野ら, 2017)。

これを克服するには、児童が学校の用意した活動に受動的に参加するだけでなく、児童自らが運動しようとする意欲が形成され、遊びを通して児童同士が積極的に相互交流を高めていく環境を設定していく必要があると考える。そのためには、休み時間に屋外で遊びたいと思っているのか、友だちとの会話を楽しみたいのか、学級の仲間全員で遊びたいのか、個人的に遊びたいのか等、児童が休み時間をどのように利用したいのか、過ごしたいかを検討する必要がある。

本研究では小学校の4年生から6年生児童の休み時間の利用・過ごし方と行動様式との関連を検討する。山下ら(2016)の報告では、児童の運動意識に男女差や学年差が影響していることが示されていることから今回も男女差や学年差の要因を取り上げて検討する。

II. 方法

(1) 対象

A県内B市の小学校3校に在籍する4年生から6年生を対象に質問紙調査を行った。

その結果、521名から回答があった。今回の分析は、回答に不備のなかった471名(4年生男子83名、女子70名、5年生男子75名、女子83名、6年生男子87名、女子73名)とした。調査を行うにあたり、調査計画をB市の教育委員会に承認を得た後に3校の職員会議で説明し、了解を得た。当該の学年の教員とは意思疎通図られ、学級への協力体制の下に実施された。

(2) 手続き

質問紙には性別、学年を記入し、氏名は無記名とした。実施期間は2018年7月である。質問紙を各学校に配布し、回収した。

質問紙は、1) 休み時間をどのように過ごしたいのか、2) 休み時間を含め、普段、どのような気持ちで行動しているのか、という二つの問いからなる。

休み時間の利用・過ごし方の質問項目は、藤原ら(2014)、渡辺ら(2000)、渡辺(2001)を参考に次のように作成した。1) 屋外でのボール遊びや遊具(「休み時間には、外でボール遊びや遊具で遊びたい」)、2) 友だちとの会話(「休み時間には、教室でおしゃべりをしたい」)、3) 休み時間の関わりの対象(「休み時間には、学級の仲間全員で遊びたい」)、4) 男女の混合(「休み時間には、男女が混じって一緒に遊びたい」)、5) 学年(「休み時間には、同じ学年の子と遊びたい」)、6) 遊び仲間の勧誘(「休み時間には、あまり話したことがない子を誘って遊びたい」)、の6項目である。回答は「はい」と「いいえ」の2件法で行った。

休み時間を含め、普段、どのような気持ちで行動しているのか(以下、行動様式)の質問項目は、小倉(2014)、柏倉(2007)、重吉ら(2009)から14項目を選定し、仮尺度を作成した。回答は「かなりあてはまる(5点)」、「ややあてはまる(4点)」、「どちらでもない(3点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「まったくあてはまらない(1点)」の5件法で求めた。

(3) 分析の観点

行動様式の仮尺度がどのような因子から構成されているのかを明らかにするために主因子分析・プロマックス回転による因子分析を行う。回転後の因子負荷量の絶対値が0.50以上を基準として因子を解釈する。

ここで得られた因子別に項目の平均得点を算出し、1) 休み時間の利用・過ごし方の差異、2) 男女差、3) 学年差から検討する。有意差の検定は、対応のないt検定を行う。有意水準を5%未満とした。分析には、IBM SPSS Statistics Version21を用いて行った。

III. 結果

(1) 行動様式の仮尺度の構成

行動様式の仮尺度について、主因子分析・プロマックス回転を行った。その結果、因子の解釈可能性の観点から4因子が最適であると判断されたため、因子負荷量が0.50以下の項目を除き、4因子で再度、同様の因子分析を行った。その結果、4因子8項目が抽出された。その結果を表1に示す。

第一因子は、クラス活動や遊んでいるときの学級への協力に関連する項目から構成されることから「学級協力」因子と命名した。第二因子は、友人とトラブルになった場合の解決方法や遊び方のマナーに関連する項目であることから「友人関係の維持」因子と命名した。第三因子は、遊びのルールを作ったり、新しい遊びや動きを創造していくことに関連する項目であることから「遊びの創造」因子と命名した。第四因子は、

昔の道具への探究心や未経験な遊び・行動への挑戦に関連する項目であることから「遊びの探究」因子と命名した。

以上の4因子に関する信頼性を検討するために、因子ごとに α 係数を算出した。第一因子の「学級協力」が $\alpha=0.738$ 、第二因子の「友人関係の維持」が $\alpha=0.559$ 、第三因子の「遊びの創造」が $\alpha=0.783$ 、第四因子の「遊びの探究」が $\alpha=0.523$ であり、8項目全体では $\alpha=0.795$ であった。

表1 行動様式の因子分析の結果

項目	因子負荷量				共通性
	I	II	III	IV	
【第I因子 学級協力 $\alpha=0.738$】					
私は、クラスで話し合いや活動をするとき、うまく進むように協力します	0.75	-0.05	0.03	-0.01	0.53
私は、クラスの人と一緒に遊ぶとき、みんなが楽しめるように協力します	0.70	-0.02	0.02	0.09	0.59
【第II因子 友人関係の維持 $\alpha=0.559$】					
私は、友だちと話し合いやけんかしたとき、自分からあやまります	-0.17	0.67	0.11	0.05	0.43
私は、遊具や遊具で遊んでいるとき、他の人に交代してとかわれたら交代します	0.24	0.56	-0.04	-0.14	0.40
【第III因子 遊びの創造 $\alpha=0.783$】					
私は、自分で新しい遊びや動きを考えてやります	-0.03	0.00	0.93	0.00	0.83
私は、遊んでいるとき、ルールを工夫したり、新しくルールをつくらせます	0.11	0.02	0.63	0.00	0.50
【第IV因子 遊びの探究 $\alpha=0.523$】					
私は、やったことがないことでも、挑戦してみようと思います	0.09	0.00	0.01	0.60	0.45
私は、昔の遊びやおもちゃをもっと知りたと思います	-0.06	0.04	-0.01	0.53	0.26
因子寄与	4.82	0.82	0.41	0.30	
累積寄与率(%)	34.46	40.31	43.21	45.36	
全体の信頼性 $\alpha=0.795$					

(2) 児童の行動様式に及ぼす要因の検討

1) 男女、学年を込みにした全体の分析

男女、学年を込みにして、休み時間にどのようにしたいか、そうでないかという二つの群で分析した。その結果を表2に示す。以下、休み時間の利用・過ごし方の項目別に述べる。

① 屋外でボール遊びや遊具遊びをしたいかどうか

第二因子である「友人関係の維持」を除き、遊びたいとする群がそうでない群よりも有意に得点が高かった。休み時間に屋外で遊具を使用し、遊具で遊びたいとする要因は学級協力、遊びの創造、遊びの探求に何らかの影響を及ぼしていると言える。

② 教室でお喋りをしていたいかどうか

両群に有意差は認められなかった。

③ 学級の仲間全員で遊びたいかどうか

遊びたいとする群がそうでない群よりも合計得点とすべての因子において有意に得点が高かった。全員参加型の休み時間の活用の要因は行動様式全般に何らかの影響を及ぼしていると言える。

④ 男女が混じって一緒に遊びたいかどうか

遊びたいとする群の方がそうでない群よりも合計得点とすべての因子において有意に得点が高かった。男女が混合して共に遊びたいとする要因は、行動様式全般に何らかの影響を及ぼしていると言える。

⑤ 同じ学年の子と遊びたいかどうか

遊びたいとする群の方がそうでない群よりも合計得点と第一因子である「学級協力」、第四因子である「遊びの探求」において有意に得点が高かった。同学年の仲間による遊びの願望に関する要因は、学級協力、遊

表2 休み時間の利用・過ごし方と行動様式

	1) 休み時間に、外でボール遊びや遊具で遊びたい			2) 休み時間には、教室でおしゃべりをしていたい			3) 休み時間には、学級の仲間で遊びたい		
	肯定群 n=265	否定群 n=205	t検定	肯定群 n=301	否定群 n=169	t検定	肯定群 n=258	否定群 n=212	t検定
	平均 (標準偏差)		t値 p	平均 (標準偏差)		t値 p	平均 (標準偏差)		t値 p
第I因子 学級協力	7.90 (1.98)	7.33 (1.99)	3.09 **	7.60 (2.00)	7.75 (2.02)	-0.75 n.s.	8.09 (1.83)	7.13 (2.08)	5.31 ***
第II因子 友人関係の維持	7.83 (1.79)	7.61 (1.83)	1.33 n.s.	7.81 (1.81)	7.60 (1.81)	1.25 n.s.	8.00 (1.78)	7.41 (1.79)	3.59 ***
第III因子 遊びの創造	7.04 (2.30)	6.51 (2.39)	2.42 *	6.87 (2.29)	6.70 (2.47)	0.76 n.s.	7.12 (2.34)	6.44 (2.31)	3.14 **
第IV因子 遊びの探求	7.64 (2.00)	7.20 (2.01)	2.37 *	7.35 (2.05)	7.63 (1.94)	-1.46 n.s.	7.80 (1.96)	7.02 (2.00)	4.22 ***
合計得点	30.42 (6.25)	28.65 (5.67)	3.20 **	29.64 (6.05)	29.67 (6.11)	-0.05 n.s.	31.00 (5.79)	28.00 (6.00)	5.49 ***
	4) 休み時間には、男女が混じって一緒に遊びたい			5) 休み時間には、同じ学年の子と遊びたい			6) 休み時間には、あまり話したくない子を誘って遊びたい		
	肯定群 n=184	否定群 n=286	t検定	肯定群 n=380	否定群 n=90	t検定	肯定群 n=178	否定群 n=292	t検定
	平均 (標準偏差)		t値 p	平均 (標準偏差)		t値 p	平均 (標準偏差)		t値 p
第I因子 学級協力	8.12 (1.98)	7.35 (1.96)	4.11 ***	7.76 (1.96)	7.22 (2.13)	2.17 *	8.16 (1.91)	7.35 (2.00)	4.39 ***
第II因子 友人関係の維持	8.00 (1.78)	7.57 (1.81)	2.56 *	7.81 (1.80)	7.41 (1.82)	1.89 n.s.	8.12 (1.75)	7.50 (1.81)	3.71 ***
第III因子 遊びの創造	7.34 (2.17)	6.47 (2.41)	3.99 ***	6.89 (2.32)	6.48 (2.47)	1.44 n.s.	7.43 (2.22)	6.43 (2.35)	4.64 ***
第IV因子 遊びの探求	7.73 (2.01)	7.27 (2.00)	2.42 *	7.55 (1.97)	7.03 (2.14)	2.08 *	8.12 (1.76)	7.04 (2.05)	5.82 ***
合計得点	31.19 (5.97)	28.66 (5.93)	4.50 ***	30.01 (5.94)	28.14 (6.39)	2.52 *	31.83 (5.86)	28.32 (5.80)	6.33 ***

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

びの探求に何らかの影響を及ぼしていると言える。

⑥ あまり話したことの無い子を誘って遊びたいかどうか

遊びたいとする群はそうでない群よりも合計得点と全ての因子において有意に得点が高かった。遊び仲間の勧誘の要因は、行動様式全般に何らかの影響を及ぼしていると言える。

以上のように、1) 屋外でのボール遊びや遊具、2) 休み時間の関わりの対象、3) 男女の混合、4) 学年、5) 遊び仲間の勧誘の要因が行動様式に何らかの影響を与えており、この五つは、特に、「学級協力」、「遊びの探求」には顕著に影響を与えていることが推測される。t検定の結果では、そのようにしたい群の方がそうでないとする群よりも得点が高い傾向にあった。

2) 男女差

休み時間の利用・過ごし方の要因と男女差の要因が行動様式にどのような影響を与えているかを検討するために2要因の分散分析を行った。表3にその結果を示す。以下、休み時間の利用・過ごし方の項目別に述べる。

① 屋外でボール遊びや遊具遊びをしたいかどうか

合計得点と「友人関係の維持」において男女差の要因と屋外で遊びたいとする要因の主効果が示された。「学級協力」、「遊びの創造」、「遊びの探求」において屋外で遊びたいとする要因の主効果が示された。「友人関係の維持」に交互作用が示された。男女差と屋外で遊びたいとする要因は「友人関係の維持」に何らかの影響を与えていると言える。

② 友だちとお喋りをしたいかどうか

「友人関係の維持」において男女差の主効果が示され、女子が男子よりも得点が高かった。男女差の要因は、友人関係に何らかの影響を与えていると言える。

③ 学級の仲間全員で遊びたいかどうか

合計得点、「友人関係の維持」において男女差の主効果と学級の仲間全員で遊びたいとする要因の主効果が示された。「学級協力」、「遊びの創造」、「遊びの探求」において仲間全員で遊びたいとする要因の主効果が示された。男女差と学級の仲間全員で遊びたいとする要因は「友人関係の維持」に何らかの影響を与えていると言える。

④ 男女が混じって一緒に遊びたいかどうか

「友人関係の維持」において男女差の主効果と男女混合で遊びたいとする要因の主効果が示された。「学級協力」、「遊びの創造」、「遊びの探求」において男女混合で遊びたいとする要因の主効果が示された。

⑤ 同じ学年の子と遊びたいかどうか

「友人関係の維持」において男女差の主効果の主効果が示された。「学級協力」と合計得点において同じ学年の子と遊びたいとする要因の主効果が示された。

⑥ あまり話したことの無い子を誘って遊びたいかどうか

「友人関係の維持」において男女差の主効果と勧誘の要因の主効果が示された。「学級協力」、「遊びの創造」、「遊びの探求」、合計得点において勧誘の要因の主効果が示された。

以上のように男女差と屋外でのボール遊びや遊具が「学級協力」、男女差と仲間全員及び男女差と男女の混合が「学級協力」と「遊びの探求」、男女差と遊び仲間の勧誘の要因が「友人関係の維持」に何らかの影響

表3 男女差と休み時間の利用・過ごし方からみた行動様式

1) 休み時間には、屋外でボール遊びや遊具で遊びたい										2) 休み時間には、教室でおしゃべりをしていたい													
肯定群					否定群					肯定群					否定群								
男子		女子			男子		女子			男子		女子			男子		女子						
因子名	n	平均	標準偏差	平均	標準偏差	性別	主効果	交互作用	性別	主効果	交互作用	性別	主効果	交互作用	性別	主効果	交互作用						
第1因子	175	7.97	(1.95)	7.77	(2.04)	7.61	(2.11)	7.65	(1.85)	n.s.	***	**	7.35	(2.19)	7.77	(1.84)	7.87	(1.93)	7.40	(2.23)	n.s.	n.s.	*
学級協力							肯定>否定																
第2因子		7.66	(1.82)	8.17	(1.67)	6.23	(2.02)	7.96	(1.62)	***	**	n.a.	7.45	(1.95)	8.06	(1.66)	7.46	(1.87)	8.00	(1.56)	**	n.s.	n.s.
友人関係の維持							肯定>否定														女>男		
第3因子		7.10	(2.42)	6.93	(2.06)	6.07	(2.72)	6.74	(2.17)	n.s.	**	n.s.	6.90	(2.49)	6.71	(2.61)	6.86	(2.15)	6.65	(2.02)	n.s.	n.s.	n.s.
遊びの創造							肯定>否定																
第4因子		7.57	(2.09)	7.79	(1.81)	6.97	(2.19)	7.32	(1.90)	n.s.	**	n.s.	7.22	(2.29)	7.43	(1.89)	7.56	(2.00)	7.81	(1.85)	n.s.	n.s.	n.s.
遊びの探求							肯定>否定																
合計得点		30.30	(6.60)	30.66	(5.55)	26.69	(6.04)	29.67	(5.21)	*	***	*	28.91	(7.00)	30.12	(5.34)	29.60	(6.33)	29.86	(5.50)	n.s.	n.s.	n.s.
							肯定>否定																
3) 休み時間には、学級の仲間全員で遊びたい										4) 休み時間には、男女が混じって一緒に遊びたい													
肯定群					否定群					肯定群					否定群								
男子		女子			男子		女子			男子		女子			男子		女子						
因子名	n	平均	標準偏差	平均	標準偏差	性別	主効果	交互作用	性別	主効果	交互作用	性別	主効果	交互作用	性別	主効果	交互作用						
第1因子	143	8.11	(1.88)	8.01	(1.75)	6.92	(2.14)	7.32	(2.02)	n.s.	***	n.s.	8.10	(2.18)	8.14	(1.45)	7.29	(1.94)	7.42	(1.98)	n.s.	***	n.s.
学級協力							肯定>否定																
第2因子		7.84	(1.86)	8.21	(1.65)	6.91	(1.84)	7.87	(1.62)	***	***	n.s.	7.90	(1.96)	8.12	(1.57)	7.16	(1.82)	8.00	(1.69)	**	*	n.s.
友人関係の維持							肯定>否定														女>男	肯定>否定	
第3因子		7.24	(2.48)	6.97	(2.16)	6.20	(2.53)	6.66	(2.08)	n.s.	**	n.s.	7.57	(2.33)	7.09	(1.95)	6.30	(2.57)	6.65	(2.21)	n.s.	***	n.s.
遊びの創造							肯定>否定																
第4因子		7.76	(2.08)	7.85	(1.80)	6.89	(2.12)	7.15	(1.90)	n.s.	***	n.s.	7.61	(2.26)	7.86	(1.71)	7.26	(2.05)	7.28	(1.95)	n.s.	*	n.s.
遊びの探求							肯定>否定																
合計得点		30.94	(6.25)	31.09	(5.18)	26.92	(6.48)	29.00	(5.36)	*	***	n.s.	31.18	(6.99)	31.21	(4.60)	28.01	(6.10)	29.35	(5.69)	n.s.	***	n.s.
							肯定>否定																
5) 休み時間には、同じ学年の子と遊びたい										6) 休み時間には、あまり話したくない子を誘って話したい													
肯定群					否定群					肯定群					否定群								
男子		女子			男子		女子			男子		女子			男子		女子						
因子名	n	平均	標準偏差	平均	標準偏差	性別	主効果	交互作用	性別	主効果	交互作用	性別	主効果	交互作用	性別	主効果	交互作用						
第1因子	192	7.74	(2.05)	7.77	(1.87)	7.15	(2.12)	7.32	(2.16)	n.s.	*	n.s.	8.11	(2.14)	8.21	(1.66)	7.32	(1.99)	7.38	(2.01)	n.s.	***	n.s.
学級協力							肯定>否定																
第2因子		7.54	(1.86)	8.10	(1.69)	7.15	(2.07)	7.78	(1.34)	**	n.s.	n.s.	8.00	(1.97)	8.26	(1.47)	7.14	(1.80)	7.91	(1.73)	**	***	n.s.
友人関係の維持							肯定>否定														女>男	肯定>否定	
第3因子		7.02	(2.50)	6.76	(2.12)	6.04	(2.59)	7.11	(2.16)	n.s.	n.s.	*	7.50	(2.34)	7.37	(2.09)	6.40	(2.58)	6.47	(2.08)	n.s.	***	n.s.
遊びの創造							肯定>否定																
第4因子		7.56	(2.05)	7.54	(1.89)	6.81	(2.34)	7.35	(1.80)	n.s.	n.s.	n.s.	8.06	(1.95)	8.18	(1.54)	7.01	(2.15)	7.08	(1.95)	n.s.	***	n.s.
遊びの探求							肯定>否定																
合計得点		29.85	(6.44)	30.17	(5.39)	27.15	(6.97)	29.57	(5.23)	n.s.	*	n.s.	31.65	(6.85)	32.02	(4.64)	27.86	(6.10)	28.83	(5.43)	n.s.	***	n.s.
							肯定>否定																

平均値 標準偏差) * p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

を与えていることが推測される。男女差が示された場合の下位検定の結果では、女子が男子よりも得点が高い傾向にあった。

3) 学年差

休み時間の利用・過ごし方の要因と学年差の要因が行動様式にどのような影響を与えているかを検討するために2要因の分散分析を行った。表4にその結果を示す。以下、休み時間の利用・過ごし方の項目別に述べる。

① 屋外でボール遊びや遊具遊びをしたいかどうか

合計得点と「学級協力」において学年差と屋外で遊びたいとする要因の主効果が示された。「遊びの創造」において屋外で遊びたいとする要因の主効果が示された。「遊びの探求」において学年差の主効果が示された。学年差と屋外で遊びたいとする要因は「学級協力」に何らかの影響を与えていることが推測される。

② 友だちとお喋りしたいかどうか

合計得点、「学級協力」、「遊びの探求」において学年の主効果が示された。

③ 学級の仲間全員で遊びたいかどうか

合計得点、「学級協力」、「遊びの探求」において学年差と学級の仲間全員で遊びたいとする要因の主効果が示された。「友人関係の維持」と「遊びの創造」において仲間全員で遊びたいとする要因の主効果が示された。学年差と学級の仲間全員で遊びたいとする要因は「学級協力」、「遊びの探求」に何らかの影響を与えていることが推測される。

④ 男女が混じって一緒に遊びたいかどうか

合計得点、「学級協力」、「遊びの探求」において学年差と男女混合で遊びたいとする要因の主効果が示された。「友人関係の維持」と「遊びの創造」において男女混合で遊びたいとする要因の主効果が示された。学年差と男女混合で遊びたいとする要因は、「学級協力」と「遊びの探求」に何らかの影響を与えていることが推測される。

⑤ 同じ学年の子と遊びたいかどうか

「遊びの探求」において学年差と同じ学年の子と遊びたいとする要因の主効果が示された。「学級協力」と合計得点において同じ学年の子と遊びたいとする要因の主効果が示された。学年差と同じ学年の子と遊びたいとする要因は、「遊びの探求」に何らかの影響を与えていることが推測される。

⑥ あまり話したくない子を誘って遊びたいかどうか

合計得点、「学級協力」、「遊びの探求」において学年差と勧誘の要因の主効果が示された。「友人関係の維持」と「遊びの創造」において勧誘の要因の主効果が示された。学年差と勧誘の要因は、「学級協力」、「遊びの探求」に何らかの影響を与えていることが推測される。

以上のように学年差と屋外でのボール遊びや遊具が「学級協力」、学年差と仲間全員が「学級協力」及び「遊びの探求」、学年差と同学年との遊びが「遊びの探求」、学年差と遊び仲間の勧誘の要因が「学級協力」及び「遊びの探求」に何らかの影響を与えていることが推測さ

表 4 学年差と休み時間の利用・過ごし方からみた行動様式

1) 休み時間には、屋外でボール遊びや遊具で遊びたい										2) 休み時間には、教室でおしゃべりをしたい									
肯定群			否定群			分散分析			肯定群			否定群			分散分析				
因子名	4年	5年	6年	4年	5年	6年	主効果	交互作用	4年	5年	6年	4年	5年	6年	主効果	交互作用			
	n=102	n=75	n=88	n=51	n=82	n=72	学年	肯定/否定		n=88	n=109	n=104	n=65	n=48	n=56	学年	肯定/否定		
第1因子	7.93	8.23	7.59	7.59	7.62	6.82	**	**	n.s.	7.77	7.87	7.17	7.88	8.00	7.38	*	n.s.	n.s.	
学級協力	(2.11)	(1.92)	(1.84)	(1.85)	(1.90)	(2.11)	4年>5年,6年	肯定>否定		(2.07)	(1.91)	(1.97)	(1.99)	(1.99)	(2.05)	5年>6年	肯定>否定		
第2因子	7.88	7.93	7.69	7.86	7.55	7.50	n.s.	n.s.	n.s.	7.90	7.76	7.80	7.85	7.67	7.25	n.s.	n.s.	n.s.	
友人関係の維持	(1.93)	(1.83)	(1.57)	(1.87)	(1.72)	(1.94)				(1.86)	(1.71)	(1.87)	(1.97)	(1.95)	(1.42)				
第3因子	7.24	7.13	6.74	6.92	6.37	6.39	n.s.	*	n.s.	7.34	6.73	6.63	6.85	6.73	6.50	n.s.	n.s.	n.s.	
遊びの創造	(2.38)	(2.21)	(2.29)	(2.10)	(2.53)	(2.41)				(2.18)	(2.29)	(2.34)	(2.41)	(2.68)	(2.37)				
第4因子	7.86	7.79	7.26	8.04	6.95	6.89	**	n.s.	n.s.	7.88	7.22	7.04	7.98	7.65	7.20	**	n.s.	n.s.	
遊びの探求	(2.13)	(1.95)	(1.86)	(1.73)	(2.11)	(1.93)	4年>5年,6年	肯定>否定		(2.09)	(2.02)	(1.99)	(1.88)	(2.19)	(1.72)	4年>6年	肯定>否定		
合計得点	30.91	31.08	29.28	30.41	28.49	27.60	**	**	n.s.	30.89	29.59	28.63	30.55	30.04	28.32	**	n.s.	n.s.	
	(6.43)	(6.55)	(5.68)	(5.28)	(5.78)	(5.60)	4年>6年	肯定>否定		(6.18)	(6.09)	(5.75)	(5.93)	(6.72)	(5.63)	4年>6年	肯定>否定		
3) 休み時間には、学級の仲間全員で遊びたい										4) 休み時間には、男女が混じって一緒に遊びたい									
肯定群			否定群			分散分析			肯定群			否定群			分散分析				
因子名	4年	5年	6年	4年	5年	6年	主効果	交互作用	4年	5年	6年	4年	5年	6年	主効果	交互作用			
	n=89	n=87	n=82	n=64	n=70	n=78	学年	肯定/否定		n=49	n=68	n=67	n=104	n=89	n=93	学年	肯定/否定		
第1因子	8.04	8.51	7.68	7.50	7.17	6.78	*	***	n.s.	8.41	8.47	7.55	7.54	7.48	7.02	**	***	n.s.	
学級協力	(1.97)	(1.53)	(1.87)	(2.08)	(2.11)	(2.03)	4年>5年,6年	肯定>否定		(1.79)	(1.82)	(2.17)	(2.08)	(1.91)	(1.84)	4年,5年>6年	肯定>否定		
第2因子	7.99	8.10	7.91	7.72	7.27	7.28	n.s.	**	n.s.	8.24	8.01	7.81	7.70	7.52	7.46	n.s.	**	n.s.	
友人関係の維持	(1.86)	(1.74)	(1.74)	(1.96)	(1.74)	(1.69)				(1.76)	(1.80)	(1.79)	(1.95)	(1.75)	(1.70)				
第3因子	7.34	7.11	6.88	6.84	6.26	6.27	n.s.	**	n.s.	7.67	7.38	7.06	6.88	6.24	6.24	n.s.	***	n.s.	
遊びの創造	(2.23)	(2.32)	(2.50)	(2.35)	(2.45)	(2.14)				(2.08)	(2.17)	(2.22)	(2.34)	(2.47)	(2.38)				
第4因子	8.06	7.87	7.44	7.73	6.70	6.73	**	***	n.s.	8.39	7.60	7.37	7.70	7.16	6.89	***	**	n.s.	
遊びの探求	(2.04)	(1.82)	(1.99)	(1.95)	(2.20)	(1.73)	4年>5年,6年	肯定>否定		(2.13)	(1.93)	(1.92)	(1.91)	(2.16)	(1.86)	4年>5年,6年	肯定>否定		
合計得点	31.43	31.60	29.91	29.80	27.40	27.06	**	***	n.s.	32.71	31.47	29.79	29.82	28.39	27.61	**	***	n.s.	
	(5.95)	(5.52)	(5.79)	(6.12)	(6.41)	(5.23)	4年>6年	肯定>否定		(5.44)	(6.13)	(5.94)	(6.13)	(6.08)	(5.35)	4年>6年	肯定>否定		
5) 休み時間には、同じ学年の子と遊びたい										6) 休み時間には、あまり話したくない子を誘って話したい									
肯定群			否定群			分散分析			肯定群			否定群			分散分析				
因子名	4年	5年	6年	4年	5年	6年	主効果	交互作用	4年	5年	6年	4年	5年	6年	主効果	交互作用			
	n=128	n=122	n=130	n=25	n=35	n=30	学年	肯定/否定		n=65	n=65	n=48	n=88	n=92	n=112	学年	肯定/否定		
第1因子	7.94	8.03	7.32	7.20	7.49	6.93	n.s.	*	n.s.	8.34	8.28	7.75	7.43	7.65	7.03	*	***	n.s.	
学級協力	(1.94)	(1.89)	(1.99)	(2.40)	(2.04)	(2.03)				(1.88)	(1.95)	(1.89)	(2.06)	(1.88)	(2.01)	5年>6年	肯定>否定		
第2因子	7.96	7.85	7.63	7.44	7.31	7.50	n.s.	n.s.	n.s.	8.31	8.09	7.92	7.56	7.48	7.47	n.s.	***	n.s.	
友人関係の維持	(1.86)	(1.76)	(1.77)	(2.10)	(1.81)	(1.64)				(1.78)	(1.65)	(1.84)	(1.94)	(1.84)	(1.69)				
第3因子	7.24	6.84	6.59	6.56	6.37	6.53	n.s.	n.s.	n.s.	7.69	7.25	7.33	6.72	6.37	6.26	n.s.	***	n.s.	
遊びの創造	(2.26)	(2.40)	(2.27)	(2.36)	(2.43)	(2.68)				(2.19)	(2.24)	(2.23)	(2.27)	(2.46)	(2.32)				
第4因子	8.02	7.50	7.13	7.44	6.83	6.93	*	*	n.s.	8.71	7.91	7.60	7.34	6.96	6.88	**	***	n.s.	
遊びの探求	(1.96)	(2.03)	(1.84)	(2.16)	(2.15)	(2.13)	4年>6年	肯定>否定		(1.47)	(1.75)	(1.93)	(2.14)	(2.20)	(1.84)	4年>5年,6年	肯定>否定		
合計得点	31.16	30.22	28.67	28.64	28.00	27.90	*	*	n.s.	33.05	31.52	30.60	29.05	28.46	27.63	*	***	n.s.	
	(5.88)	(6.09)	(5.62)	(6.62)	(6.68)	(6.04)	肯定>否定			(5.51)	(5.93)	(6.03)	(5.90)	(6.23)	(5.32)	4年>6年	肯定>否定		

平均値 標準偏差) * p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

れる。学年差が示された場合の下位検定の結果では、概ね、4年生が5、6年生よりもあるいは6年生よりも得点が高い傾向にあった。

IV. 考察

(1) 行動様式の因子構造について

今回の分析では、「学級協力」、「友人関係の維持」、「遊びの創造」、「遊びの探求」の4因子が抽出された。

児童が一人で遊ぶことが増えており(柏倉, 2007)、児童同士のかかわり合いが希薄になっており教師が意図的に共同的に活動する場面を作り出す必要がある

(小林ら, 2005)ことが指摘されている。「学級協力」因子は、休み時間が共同的な活動を行う機会として有効であることを示している。「自分から友だちを遊びに誘う」ことや「困っているときに友だちに手伝ってほしいとお願いする」には積極的・主張的かかわりのスキルが高い(大畠ら, 2002)ことから、「学級協力」因子は、友だちと遊ぶことにより良好な人間関係が形成でき、協力する態度が生まれることを反映していると考えられる。

「自分にも悪いところがあると思ったら“ごめんね”などとあやまる」、「こんなことを言ったら、相手に悪いと思うことは言わないようにする」等の「共感・援助的かかわり」が他者と肯定的にかかわり、円滑な付き合いをするために必要なスキルであるとされている(重吉ら, 2009)。幼稚園や保育園では、物の貸し借

りや遊ぶ順番などの譲り合いができず、友だちとの小さなトラブルが多く(小倉, 2014)、児童同士の関わり方には、自ら謝罪したり、譲歩したりするトラブルの解決のスキルが重要である。「友人関係の維持」因子は、こうしたスキルを反映していると考えられる。

現代の児童は新たな遊びを見つけ出せない(小倉, 2014)、自分でおもしろさを遊びの創造することが不得意である(柏倉, 2007)ことが指摘されている。「遊びの創造」因子は、ルール上の創意工夫や新しい遊びや動きを創造することが児童の遊びに包含されていることを示している。

「伝承遊びをやってみよう」児童の割合が他の遊びより少なかったとする(長谷川ら, 2005)。今回の対象の小学4、5、6年生は、経験していない遊びへの挑戦や伝承遊びやその道具に関心を持っている集団であると思われ、「遊びの探求」因子は、伝承遊びへの関心を反映していると考えられる。

(2) 児童の行動様式に及ぼす諸要因の検討

1) 屋外でのボール遊びや遊具遊び要因と男女差, 学年差

児童にとって校庭は最も身近な屋外環境であり、体育の授業だけではなく、重要な遊び・学習の場である(長山, 1988)。また、遊び場の環境は、遊んで面白いと感じる自然や遊具などの存在があるとする(長山, 1988)。学校の校庭をはじめ、屋外での運動スペースやジャングルジム・ブランコなどの遊具は、児童の遊び

にとって重要な要素である。小学生が屋外で行う遊びは、ケイドロなどの鬼ごっこ、サッカー、ドッジボールなどである(安垣, 2012)。これらは、ある程度広いスペースを利用し、大人数で行う遊びである。

「学級協力」において屋外での遊び要因に主効果が示されたが、男女差の要因と屋外での遊び要因との間で交互作用が示され、屋外で遊びたくないと思っている女子は、男子よりも得点が高かった。休み時間に教室でおしゃべりをしていたいかどうか、については男女差に主効果が示されなかったことから女子は教室で過ごすことにより、学級協力の意思を高めていることが推測される。女子に屋外遊びを推奨するだけでは女子の学級協力への意思を妨げる可能性も考えられる。

男女差と屋外で遊びたいとする要因は「友人関係の維持」に何らかの影響を与えていた。この因子は、友人とトラブルになった場合の解決方法や遊び方のマナーに関連する項目を含んでいる。トラブルを解決するには道具や遊具を譲ったり、けんかを回避したりする必要がある。屋外での遊びには場所や遊具の制限があり、屋外遊びの経験を通して譲り合うことを学んでいるものと推察される。

運動意識の調査において男子は運動自己肯定感を重視しているが、女子は周囲からの応援を重視していることが示されている(山下ら, 2016)。今回、「友人関係の維持」において女子は男子よりも有意に得点が高く、女子は「友人関係の維持」を注視していることが示された。このことは、運動する際には周囲の仲間との関係性を非常に大切にし、休み時間に一緒に遊ぶ仲間とけんかをしないで遊具を譲り合いながら遊ぶ技法を習得しているものと推測される。

学年差と屋外で遊びたいとする要因は「学級協力」に影響を与えていた。小学校高学年では、集団の規則を理解し、集団活動に主体的に関与し、遊びなどで自分たちの動きが見られるとされるが(文科省, 2009)、今回、「学級協力」において4年生と5年生は6年生よりも得点が高かった。集団規則の理解や主体的な集団活動の参加には、学年の要因に加え、屋外で遊びたいとする要因が影響するものと推察される。また、「遊びの探求」においても4年生は5年生と6年生よりも有意に得点が高く、中学年から高学年に移行する時期に遊びへの探求心を増強させる必要がある。

2) 教室での友だちとの会話と男女差, 学年差

休み時間に教室でおしゃべりをしていたいかどうかについては、したいと思っているそうでない群との間に行動様式全体には差は認められなかった。しかし、第二因子の「友人関係の維持」で男女差の要因のみに主効果が示され、女子は男子よりも得点が高かった。女子は、教室で友だちと会話していたいかどうかよりも「友人関係の維持」を重視していることが推測される。教室での友だちとの会話と学年差の関係では、合

計得点、「学級協力」、「遊びの探求」において学年差のみに主効果が示された。「学級協力」では5年生が6年生よりも得点が高く、「遊びの探求」では4年生が6年生より高かった。「学級協力」と「遊びの探求」には休み時間に教室で友達と会話しているかどうかよりも学年要因の方が強く影響していると言える。

3) 学級・仲間と男女差, 学年差

今回、休み時間に学級の仲間で遊びたいとする群はそうでない群よりも行動様式の合計得点とすべての因子の得点において高かったことから学級で遊ぶことの意義が十分に認められる。男女差の要因からみると「友人関係の維持」で女子が男子よりも高く、学年差からみると「学級協力」と「遊びの探求」で4年生が5、6年生よりも得点が高かった。「学級協力」には、学級の仲間で遊びたいとする要因と学年要因が、「友人関係の維持」には男女差要因が、遊びへの探求には学級の仲間で遊びたいとする要因と学年要因が影響していると言える。

4) 男女の混合と男女差, 学年差

休み時間に男女混合で遊ぶ割合は、低学年で約40%、中学年で約10%、高学年ではきわめて少ない、という報告があり(福富ら, 1969)、学年が進行するにつれて男女混合で遊ぶ割合が減少する傾向が示されている。こうした傾向を改善するために男女共修(共習)の重要性が唱えられてきた。体育授業の男女共修において男女がお互いに関わることにより相互交流の楽しさや男女でおこなう運動の手法、楽しみ方を身に付けられるとする(日野, 2002)。男女と一緒に活動する時間が長ければ長いほど男女の身体的違いを理解し、相手を認め、励まし、協力し合うために学級のまとまりが良くなり、学習意欲も向上するとする(土井, 1984)。異性に対する思いやりの育成には男女共習授業に教育的効果がある(神宮, 1984)、など報告があり、休み時間の遊びにおいても男女が混ざって遊ぶことによりこれらの効果が期待できる。

男女混合で遊びたいと思っている群はそうでない群よりも行動様式のすべてにおいて得点が高かったことから男女共修(共習)の意義が認められる。このことは、「友人関係の維持」で女子に、「学級協力」と「遊びの探求」で4年生に顕著に現れている。

5) 遊び仲間の学年と男女差, 学年差

運動時間が少ない児童生徒への取組事例として石川県宝達志水町立相見小学校が紹介されている(文科省, 2015)。これによると異学年交流によって上級生が下級生の見本となり、積極的に体力向上を図る姿が見られ、運動の苦手な女子にも積極性が出始めたとする。また、様々な仲間と群れる遊びは、弱者への思いやりや仲間

に対する憧れや尊敬の気持ちを育む(小倉, 2014)ことが報告されており, 異学年で遊ぶことの重要性が示されている。

今回, 異学年で遊ぶことの重要性を認識した上で同学年で遊びたいかどうかを検討した。それは休み時間に同学年で遊ぶ児童の経験が, 円滑な学級活動や学級・学年単位の遊び活動に反映されるのではないかと考えたからである。このこと的一端は, 同学年で遊びたいとする群は, そうでない群よりも「学級協力」と「遊びの探求」で得点が高いことに示されている。特に「遊びの探求」では, 学年差要因と同学年で遊ぶことの要因の両方が影響しており, 「友人関係の維持」では, 同学年で遊ぶことの要因は示されず, 男女差要因のみが影響していることが示された。「友人関係の維持」に男女差要因が強く影響していることが示唆される。

6) 遊び仲間の勧誘と男女差, 学年差

休み時間は, 短時間であるためお互いがすべて接触できるわけではない。普段から一緒に遊んでいる特定の集団以外の学級仲間や教室で一人になっている子, 他の学級の子など, あまり話したことのない子を誘うにはコミュニケーション能力が必要である。児童は集団で遊ぶ中でルールを守る精神や協調性, 忍耐力を身につける(馬場, 1999)と指摘されていることから, あまり親しくない者同士が遊びを媒介として友達関係が築かれると考えるのは自然なことである。

あまり話したことのない子を誘って遊びたいとする児童はそうでない児童よりも行動様式のすべてで得点が高く, 遊びの媒介要因の重要性が示された。「学級協力」と「遊びの探求」には, 遊び仲間の勧誘と学年差の要因が, 「友人関係の維持」には, 遊び仲間の勧誘と男女差の要因の両方が影響していることが示され, 遊びの媒介要因と学年差, 男女差の3者の相互関係の重要性が示唆される。

(3) 伝承遊び

今回, 休み時間を含め, 普段, どのような気持ちで行動しているのか, という行動様式の仮尺度を因子分析したところ, 「遊びの創造」と「遊びの探究」という遊びに関連する因子が二つ抽出された。このことは, 児童たちが社会文化的側面に目を向けており, 遊びを継承していく存在であることを示していると思われる。また, 諸要因の分析において「屋外, 道具や遊具を用いる, 学級全員, 男女混合, 同学年, 親しくない子を誘う」など要因が行動様式に影響していることが示された。

これらの条件を満たすものとして伝承遊びがある。伝承遊びは面白い要素が世代から世代へ受け継がれてきた遊びであり(穂丸ら, 2007), 全ての児童が集団で楽しく遊べる遊びである(石川ら, 2013)。また, 児童

の発育発達に欠かせない「ふれあい」, 「コミュニケーション」, 「体力向上」などの要素を多く持っている(穂丸, 2008)。サッカーや野球などは規定人数やチーム分けのために偶数などの人数制限があるが, 伝承遊びは人数制限が厳格でない。伝承遊びはバリエーションの豊富さから, ルールに柔軟性があり, どんな体格差や体力差があっても誰もが遊べる(山下ら, 2013)ことから, 男女混合であっても, 普段一緒に遊ばない子でも気兼ねなく遊ぶことができる。伝承遊びは, 児童にとって純粋に面白いと感じる要素が含まれているために児童の自発的な身体活動が促される(山下ら, 2014)。近年では, 伝承遊びをうまくできる児童が減少し, やる気があると答えた割合が他の遊びより少ない(長谷川, 2005)。児童が主体的に遊ぶその遊び方を知らない可能性が考えられる。今回の結果から周囲が遊び環境を整備し, 遊びの材料を提供することにより児童が主体的に遊ぶ機会が増加するものと考えられる。

学級の仲間全員で遊ぶには, 30名~40名ほどの大人数となる。大人数でできる遊びには, 鬼ごっこやかくれんぼ, だるまさんがころんだ, ドロケイなどの鬼遊びや, 大縄などがある。大縄用の縄跳びだけでなく, 短縄, 中縄, ゴム跳び遊びに用いるゴムなどでも代用が可能である。遊びの道具にも着目して検討していく必要がある。

V. おわりに

本研究は, 児童たちが教師の意図的な指示がなくても児童自らが運動の管理ができる活動を工夫していく環境を提供し, 豊かな児童環境を創造していくための基礎研究としてなされた。本研究では, 先行研究を基に14項目からなる行動様式の仮尺度を構成し, 因子分析の結果, 「学級協力」, 「友人関係の維持」, 「遊びの創造」, 「遊びの探求」という4因子が抽出された。これらの因子は, いずれも学習集団の基礎となるものであり, これらを如何に形成していくかが課題となる。今回, 屋外でのボール遊びや遊具, 休み時間の関わりを対象, 男女の混合, 学年, 遊び仲間の勧誘の要因が行動様式に何らかの影響を与えていることが示唆されたことから, 休み時間に可能な大人数でできる遊びとして大縄用の縄跳びだけでなく, 短縄, 中縄, ゴム跳び遊びなどが活動の候補として考えられる。休み時間にこうした活動を取り入れて児童の運動意識の変容を検討することが今後の課題である。

文献

- 1) 穂丸武臣・丹羽孝・勅使千鶴(2007)日本における伝承遊び実施状況と保育者の認識 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究, 7, 57-78.

- 2) 馬場桂一郎 (1999) 今, 児童たちの遊びは 体育科教育, 47 (16), 13-16.
- 3) 土井池晃 (1984) 中学校で男女合同の体育授業を 実践してみた 体育の科学, 34 (6), 458.
- 4) 神宮正 (1984) 中学校における男女合同の体育授業—生徒の意欲を高める走運動をめざして— 体育の科学 34 (11), 857.
- 5) 藤原正光・成田悠都子 (2014) 学校の学校生活・学級適応に関連する要因が学校享受感に及ぼす効果 教育研究所紀要, 23, 95-104.
- 6) 福富久夫・安蒜俊比古 (1969) 学校造園計画に関する研究(第1報) 千葉大学園芸学部学術報告, 17, 43-52.
- 7) 長谷川雅康・豊留由美 (2005) 児童の遊びの変化とその意欲への影響に関する研究 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 15, 181-195.
- 8) 日野克博 (2002) 選択制授業・男女共習授業の進め方 体育科教育学入門, 156.
- 9) 稲員祥子 (2008) 授業と保育現場における「伝承遊び」導入の試み 下関短期大学紀要, 26, 99-111.
- 10) 石川恭・加藤玲香 (2013) 小学校体育科への伝承遊び導入について—児童たちの直面する様々な問題とのかかわりから— 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 3, 19-25.
- 11) 柏倉和弘 (2007) 現代の児童たちと遊び(その2) 昭和40年代との比較を通して 羽陽学園短期大学紀要, 8(1), 123-133.
- 12) 小林功・高柳恭子・岩渕千鶴子・五十嵐市郎・原由美・前原由紀・稲川知美・星野さやか (2005) 協同的な活動の模索 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 28, 197-206.
- 13) 文部科学省 (2002) 児童の体力向上のための総合的な方策について (答申)
- 14) 文部科学省 (2009) 平成20年度文部科学白書第2部第6章 Topic2 平成20年度全国体力・運動能力, 運動習慣等調査結果について
- 15) 文部科学省 (2014) 平成25年度全国体力・運動能力運動習慣等調査結果取組事例
- 16) 文部科学省 (2015) 平成26年度全国体力・運動能力運動習慣等調査結果報告書 分析結果と取組み事例
- 17) 長山宗美 (1988) 子供の遊びに影響を与える環境的要因に関する研究 造園雑誌, 51 (5), 222-227.
- 18) 中台佐喜子・金山元春・前田健一 (2003) 幼児の仲間集団における人気度と社会的スキル: 同性仲間と異性仲間からの評価 広島大学心理学研究, 2, 151-157.
- 19) 大島みどり・本田千尋・北原麻理子・津久井敦子・中山純子・根本喜代江・小林正幸 (2002) 児童期における遊びと社会的スキルの関連—遊びの種類と頻度の視点から— 東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 26, 111-126.
- 20) 小倉基 (2014) 小学校入学期における「よりよい学習集団づくり」を目指した体育授業—小学校1年生のボールゲームの実践を通して— 教育実践研究, 24, 163-168.
- 21) 奥野暢通・八橋未来 (2017) 児童の外遊び改善に関する一考察—小学校休み時間における外遊びに関するアンケートの結果をもとに(第2報 Y市立 K小学校を対象に)— 四天王寺大学紀要, 63, 325-344.
- 22) 仙田考 (2005) 坂田小学校における休み時間の遊び行動分布図からみる校庭改善の効果に関する研究 ランドスケープ研究日本造園学会誌, 68 (5), 837-842.
- 23) 重吉直美・森田愛子・湯澤正通・大塚泰正 (2009) 小学生の社会的スキルと一緒に遊ぶ人数の関係についての検討 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 8, 87-93.
- 24) 高橋幸一・西田順一 (2012) 児童の身体活動および座位活動がメンタルヘルスに及ぼす影響—性と身体活動行動変容段階を考慮した検討— 群馬大学教育学部紀要, 47, 109-124.
- 25) 鶴山博之・橋爪和夫・中野綾 (2008) 児童の遊びの実態に関する研究 富山国際大学国際教養学部紀要, 4, 133-137.
- 26) 山田千明・清水亜紀・相原佑美 (2012) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続—教科活動につながる協同的な遊びと学びについて考える— 山梨県立大学人間福祉学部紀要, 7, 59-68.
- 27) 山下玲香・山下純平 (2013) 児童の体力向上を目的とした運動系伝承遊びの学校教育への導入—学校・家庭・地域をつなぐ— 愛知教育大学保健体育講座紀要, 38, 27-30.
- 28) 山下玲香・石川恭・都築繁幸 (2014) 体力向上の取り組みの実践から見た児童の体力低下に関する一考察 教科開発学論集, 2, 185-191.
- 29) 山下玲香・都築繁・石川恭 (2016) 児童の運動意識とそれに及ぼす男女差及び学年差の影響 発育発達研究, 71, 1-8.
- 30) 安恒万記 (2012) 小学生の遊び場から見る都市公園再整備の課題 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, 7, 207-219.
- 31) 渡辺義行・久世早苗 (2000) 体格および運動能力の発育発達に関する縦断的観察 岐阜大学教育学研究報告, 24(2), 23-32.
- 32) 渡辺義行 (2001) 小学校における昼休みの運動遊びに関する調査研究 岐阜大学教育学研究報告, 26(1), 73-78.